

甕	G	大型甕	—	1055～1078
	H	該当なし	未検出	1080～1082
	—	甕B	—	—
鉢	A	大型鉢A	—	1092～1107
	B	該当なし	未検出	1110～1114
	C	(大型鉢F)	—	1115～1122
	—	大型鉢D	—	—
	—	大型鉢E	—	—
高杯	A	該当なし	名東遺跡 S B 2004	1125～1129
	B	該当なし	名東遺跡 S L 18	1130～1134
	C	高杯A	—	1135～1157
	D	(高杯D)	—	1158～1166
	E	該当なし	久米池南遺跡 第2号テラス状遺構	1168～1169
	—	高杯B	—	—
	—	高杯C	—	—
	脚	脚A	—	1172～1193

(2) 分類結果から

壺、甕、鉢、高杯ともに器種分類した資料の大部分が大久保氏の抽出資料の中に存在することがわかった。すなわち、香川県の東部に位置する池の奥遺跡においても、高松平野を中心とした地域の中期後半段階の弥生土器と同じ型式のものが普及していたことが証明できたと言えるであろう。

ところが、4種類の器形のそれぞれについて同段階に高松平野を中心とする地域には存在していなかった器種が1～5種類あることも判明した。そのうちのいくつかについては高松市久米池南遺跡と徳島県名東遺跡の出土品の中に類似資料があることを認めたため、今後は香川県内の既存の出土品あるいは香川県東部の遺跡に特有の資料の中から類似資料が発見される可能性を秘めながらも、徳島県側から土器そのものあるいは土器製作技術が相当量搬入されている可能性が濃厚になったと言える。

なおこれまでの作業の結果、特別な器種として分類できなかった弥生土器についてもその起源が香川県外に求められることも考慮する必要があるであろう。

2 「池の奥型土器群」の提唱

弥生土器が良好な状態で出土した遺構にS K 12とS K 19がある。前者はI区の第3段階の集落に伴う遺構であり、集落の中央部に位置することから共同施設の可能性がある。また後者は同区の第4段階の集落に伴い、竪穴住居跡に隣接する井戸様の生活遺構である。したがって、両遺構ともに集落が拡大した時期に所属し、出土品は特殊な器形を含まない生活遺物が主体であると考えられるため、日常的に使用されていた土器の様相を把握する一括資料として有効である。

そこでS R 02出土弥生土器について器種分類した観点から、S K 12とS K 19の一括資料のうち器形にまとまりのあるものを器種分類して土器群に共通する特徴を見出す。

(1) 器種分類

① S K 12出土資料 壺が3種類、甕が2種類、鉢が2種類、高杯が1種類に分類できる。

〔壺D類〕 316～319。口縁端部が肥厚されてキザミメや凹線文が施された装飾性の豊かな器種である。

〔壺J類〕 320～324。頸部以上の部位が直立する形態であり、口縁端部が細く成形されているもの(320)と、端面が成形されているもの(321～324)に分かれる。後者はやや受け口状の形態であり、

口縁部外面に凹線文が施されているものが多い。322と323の頸部には二枚貝の殻を使用した刺突文が施されている。さらに頸部の付け根部分に凸帯が貼り付けられている点も特徴である。

〔壺N類〕 325。口縁部が内側へ傾く形態であり、外面に凹線文が施されている。

〔甕F類〕 334～340。口縁部が水平気味に開口して上端部がつまみ上げられた形態である。

〔甕G類〕 341、342。口縁端部に強いヨコナデが施されることにより、広い端面が作り出されるが、凹線文等の装飾性は弱い。

〔鉢A類〕 351、352。口縁部は端部が内外方向に肥厚され、外面には凹線文が施されている。

〔鉢C類〕 355、356。体部が半球状の形態であり、口縁部は受け口状に開口する。

〔高杯C類〕 363～365。口縁部の端面が内外方向に肥厚された形態である。

②SK19出土資料 壺が1種類、甕が3種類に分類できる。

〔壺D類〕 371、372。体部が算盤珠形で、頸部から口縁部にかけて逆ハ字形に開口する形態である。

〔壺J類〕 370。頸部から口縁部にかけて直立し、端部は球状に丸く成形されている。体部は算盤珠状の形態である。

〔甕D類〕 378、379。短い口縁部と肩が張らない長い体部が特徴である。

〔甕F類〕 374～376。口縁上端部がつまみ上げられた形態である。

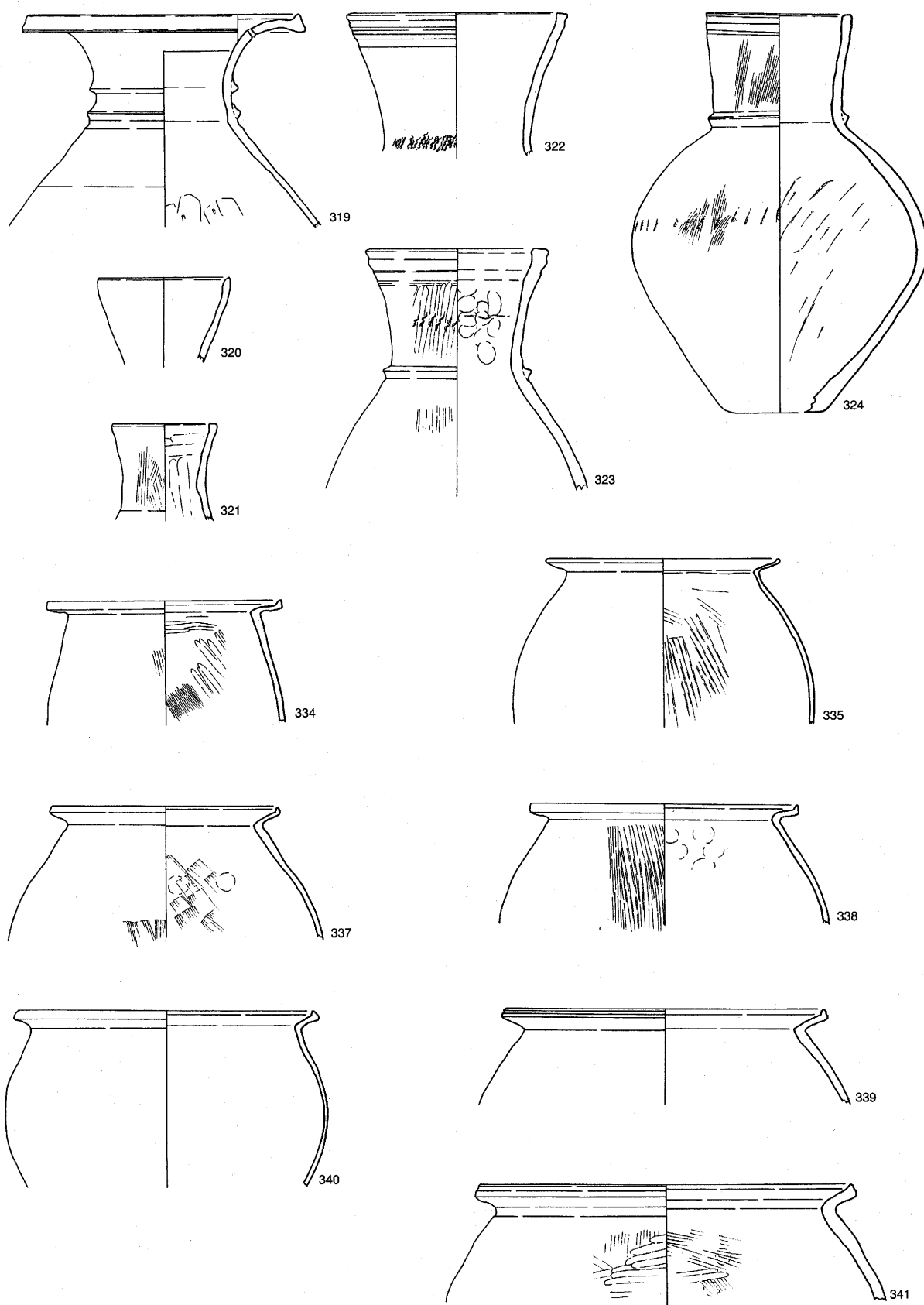
〔甕G類〕 377。口縁端部に強いヨコナデが施されることにより、広い端面が作り出された器形である。

(2) 分類結果から

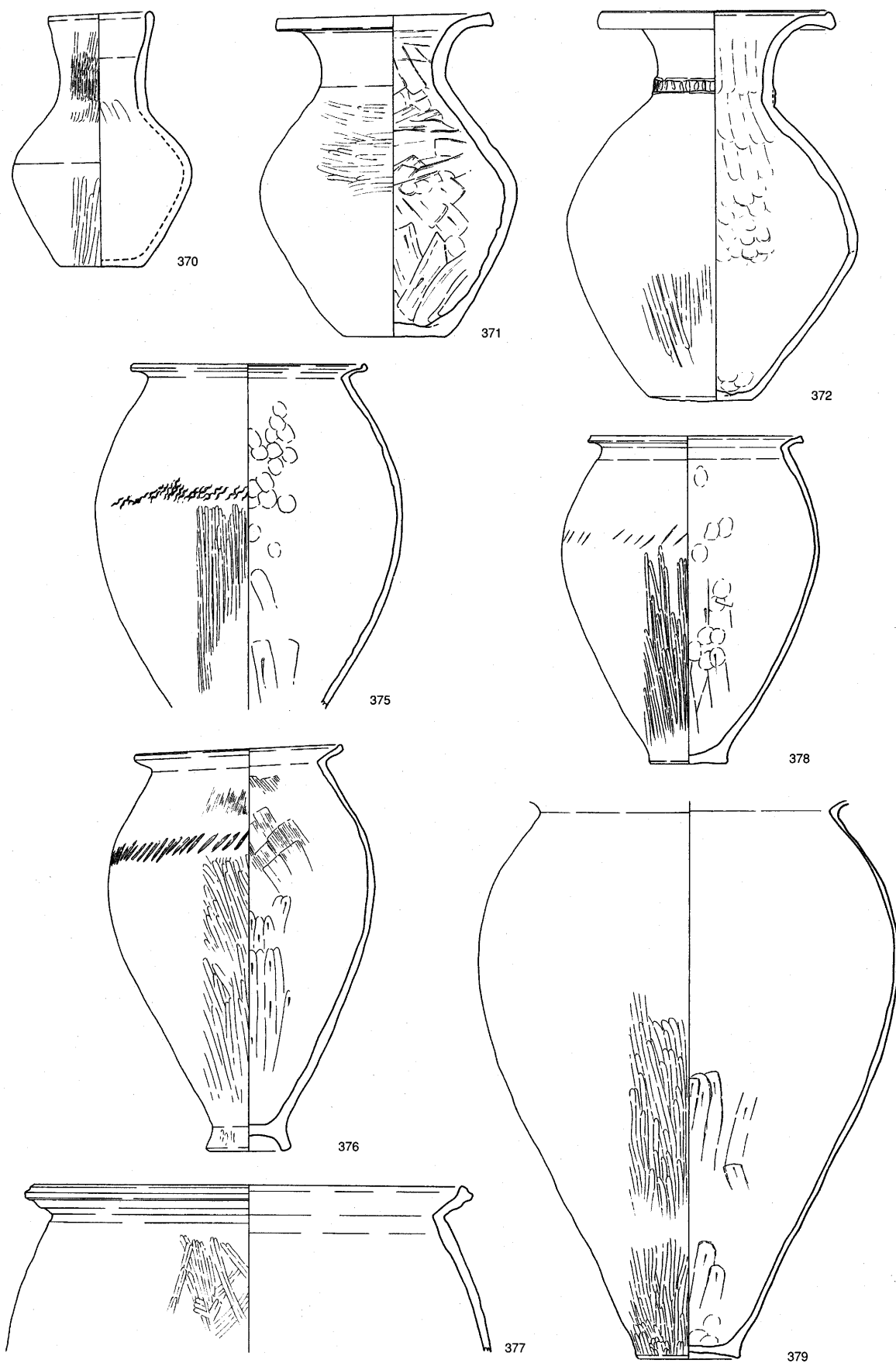
上記のとおり、SK12とSK19の主要な弥生土器の分類結果は壺でD類とJ類、甕でF類とG類を共有するというきわめて似通った状態を示した。

すなわち、遺物の保存状態が良好であるとともに、複数の器種が混在するという理由だけで無作為に選んだ資料にもとづく結果であることから、共通するそれぞれの器種については本遺跡の弥生時代中期後半頃の弥生土器の中でも最も普遍的であり、遺跡のモデルとなり得る土器群と考えられる。

そこで本項では壺のD類とJ類、甕のF類とG類を一括した「池の奥型土器群」(仮称)というまとまりを設定して、香川県の東部地方における今後の弥生時代中期後半頃の弥生土器の様相を知る上でのメルクマールとすることを提案する。



第130図 「池の奥型土器群」実測図1



第131図 「池の奥型土器群」実測図2